

## 自己評価報告書(最終報告)

コース等名

言語系コース(英語)

記載責任者

伊東 治己

## ■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 大学院の学生定員の充足

貴専攻・コースにおける過去5年間の大学院学生定員充足状況を分析・検証し、達成目標を設定するとともに、どのような具体的方策を立てて、目標達成に向けて取り組んでいくかを示して欲しい。

## 1. 目標・計画

過去5年間の本コースへの入学者数は10名、10名、9名、14名、15名と着実に増加しており、かつ平成23年度は20名を超えることが予想されている。よって、これまで続けた取り組みを今後も継続していきたい。

- 本コースの卒業生で教職に就いている者に大学院入学を案内する。
- 本学の学部学生に大学院進学を勧める。
- 公開講座や研修会・講演会および他大学への集中講義において、受講生に大学院を案内し入学を勧める。
- Webサイトを通じて広報活動を実施する。
- 関西の大学を中心に、その就職支援室に英語コースのパンフレット、ポスターなど入学案内を送付する。
- 英語教育の専門誌に受験案内を掲載する。

## 2. 点検・評価

過去5年間の本コース(大学院)への入学者数は10名、10名、9名、14名、15名と着実に増加しており、平成23年度は22名の大学院新入生(うち、現職教員3名、教員養成プログラム在籍14名、海外からの留学生2名)を迎えることができた。目標・計画で示した取り組みの成果が着実に現れていると言える。今後も定員充足の取り組みを継続していきたい。

## I-2. 学生支援の取り組み

学生の卒業時・修了時における「質」保証のためには、常日頃から学生に対する支援を推進していくことが必要である。

貴専攻・コースにおけるこれまでの学生支援の取り組み状況を分析・把握し、本年度どのような学生支援の取り組みを行うか、具体的な方策を示して欲しい。

## 1. 目標・計画

- TOEIC IPテストを実施する。
- 海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行う。
- 学部学生用の学習室(俗称、E-ポケット)を充実させ、自主学習の環境を整える。
- 英語資格試験の情報を学生に周知する。
- 留学生のための学習・生活支援を行う。
- ゼミ単位で採用試験を意識した個別指導を行う。

## 2. 点検・評価

○平成23年度もTOEIC IPテストを学部生・大学院生全員に対して実施し、その結果を学部生・大学院生の指導に生かしている。

○海外留学に関しては、平成23年度は2名の大学院生が本学の短期派遣制度を利用して米国に留学している。また、学部生1名がオーストラリアの中等学校に日本語ティーチングアシスタントとして赴いている。

○学部学生用の学習室（俗称、E-ポケット）は学部生によって自学自習のため、継続的に使用されている。

○TOEICやTOEFLおよび英検など、英語資格試験の情報を学生に積極的に周知してきた。学部生・大学院生の意識も高まりを見せている。

○平成23年度は2名の留学生（中国とインドネシアから）が大学院に正規学生として入学し、勉学に勤しんでおり、彼らに対して学習・生活支援を行った。また、インドネシアから教員研修留学生が1名、英語コースに所属し、当初の研究目的を達成した。さらに、1名の留学生が博士課程の研究生として在籍しており、継続的に指導を行った。

○ゼミ単位で採用試験を意識した個別指導を行った。

## II. 分野別

### II-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

全学の学生に対して

○全学開講の授業「英語コミュニケーション」は予算と人事が許す限りネイティブ・スピーカーが担当することとし、本学学生の英語運用能力を高めるのに資する。

○同「英語リーディング」はTOEIC対策とし、教員採用試験や他の就職試験に役立てる。

コースの学生に対して

○TOEIC IPテストを実施する。

○海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行う。

○学部学生用の学習室（俗称、E-ポケット）を充実させ、自主学習の環境を整える。

○英語資格試験の情報を学生に周知する。

○留学生のための学習・生活支援を行う。

○ゼミ単位で採用試験を意識した個別指導を行う。

## 2. 点検・評価

全学の学生に対して

○全学開講の授業「英語コミュニケーション」は平成23年度もすべてネイティブ・スピーカーが担当しており、本学学生の英語運用能力の向上に貢献している。

○同「英語リーディング」については、平成23年度もTOEIC対策用のテキストを採用し、教員採用試験や他の就職試験に役立つような指導を展開した。

コースの学生に対して

○学部生、大学院生全員に対して、TOEIC IPテストを実施した。

○海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行った。その結果、2名の大学院生が本学の短期派遣制度を活用して米国に留学し、1名の学部生がオーストラリアの中等学校で日本語ティーチングアシスタントとして活躍している。

○学部学生用の学習室（俗称、E-ポケット）は学部生によって継続的に活用されている。

○TOEICやTOEFLおよび英検など、英語資格試験の情報を学生に積極的に周知してきた。学部生・大学院生の意識も高まりを見せている。

○平成23年度は2名の正規大学院生留学生、1名の教員研修留学生、および1名の博士課程研究生が英語コースに所属し、勉学・研究に従事したが、彼らに対して定期的にゼミを行うなど、学習・生活支援を行った。

○ゼミ単位で採用試験を意識した個別指導を行った。

### II-2. 研究

#### 1. 目標・計画

○教員各自が自己の研究を遂行できるように、教員間で協力体制をとる。

○英語教育上必要と考えられる研究テーマを設定し、教員相互に協力して共同研究を進める。

○学部入学前期・後期試験の内容・実施方法に関しての見直しを行い、変更の可能性を探る。

○科学研究費補助金の申請を積極的に行う。

○小学校での外国語活動の必修化に対応するためのカリキュラム改革に向けての研究を進める。

## 2. 点検・評価

○教員各自が自己の研究を遂行できるように、教員間で協力体制をとった。特に、平成23年度は3名の教員が海外出張(通算9回)を行ったが、出張期間中の職務は他の教員が担当した。  
○平成23年度も教員相互の協力のもと、公開講座(2講座)や教員免許状更新講習(3講習)を実施した。  
○学部入学前期・後期試験の内容・実施方法に関しては、受験者数の推移を見ながら変更の可能性を探っているが、平成23年度は当面変更しなかった。今後、受験者数が極端に減少すれば、変更を考慮する予定である。  
○科学研究費補助金については、平成23年度は継続分も含めて3名の教員(合計5プログラム)が交付を受けた。  
○小学校での外国語活動の必修化に対応するためのカリキュラム改革については、平成24年度新入生から「小学校英語教育論」を必修の授業として開講することにした。3年生対象の授業であるため、それまでは2年生以上の学部生および大学院生に対して選択科目として開講することとした。

## II-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

○教員各自が担当する各種委員会などの職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に関与する。  
○本コースの性格に鑑み、国際交流を支援し、特にコースに関係する分野において積極的に参加し協力する。

## 2. 点検・評価

○教員各自が担当する各種委員会などの職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に関与した。  
○本学の国際交流を支援し、特にコースに関係する分野においては積極的に参加し、協力した。平成23年度は、フィンランドから1名の客員研究員と1名の国際学術研究員を招聘した。

## II-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

### 1. 目標・計画

○附属学校との連携については、授業での取組を中心に、附属学校への協力を図る。  
○公開講座及び教育支援講師派遣制度などを通して、地域との連携を強化する。  
○海外の研究教育機関との共同研究・事業を推進する。

## 2. 点検・評価

○附属学校との連携については、附属小学校と附属中学校と連携して大学院の教育実践フィールドの授業を展開した。また、推進授業や研究発表会でコースの教員が指導助言者として参加した。また、附属中学校でのLFタイムにおいてコースの教員が講師を勤めた。  
○平成23年度も公開講座(2講座)、教員免許状更新講習(3講習)を実施するとともに、教育支援講師派遣制度などを通して、各地で実施された教員研修講座に講師や指導助言者として参加した。  
○海外の研究教育機関との共同研究・事業の推進に関しては、平成23年度はフィンランドから1名の客員研究員と1名の国際学術研究員を招聘した。

## III. 本学への総合的貢献(特記事項)

○小学校外国語活動が平成23年度から高学年において必修化されたことを受けて、平成24年度学部新入生から「小学校英語教育論」を必修科目として開講するというカリキュラム改革を行った。小学校英語教育に関する研究や教員研修の充実  
は本学の中期目標のなかでも重要な施策になっており、今後も小学校英語教育に関する研究・教員研修の充実に向けて  
コースとしても努力し、本学の中期目標の達成に貢献していきたい。  
○大学院定員の充足が本学の最重要課題になっているが、平成23年度は22名の大学院新入生(うち、現職教員3名、教  
員養成プログラム在籍14名、海外からの留学生2名)を迎えることができた。コースとしての定員は15名であることから、  
本学の定員充足に対して多少の貢献ができたと思われる。  
○博士課程の学生の本学への入学が年々少なくなっている傾向にあるが、平成23年度は1名の院生(現職教員)を英語  
コースに迎えることができ、連合大学院における本学の存在感の維持に貢献することができた。なお、平成23年度は合計  
4名の正規の大学院生と1名の研究生が英語コースに在籍している。